
人間と妖怪。

乃普介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間と妖怪。

【Nコード】

N3878T

【作者名】

乃普介

【あらすじ】

激しい雨の降る日の、この世のどこかにある山の小さな神社で
きたお話。

(前書き)

この小説には多大な自己解釈と東方自体の迷子が発生したりします。
注意をお願いします。

――激しい雨が降る夜。まだ昼時であるというのにそれを忘れさせる深い曇りの日の話。

大きな山の連なる山脈の一角に地元の人から妖怪の山と呼ばれ恐れられる一際大きな山があった。

その山はその名の通り、人を食らう妖怪が住む山であった。

そんな恐怖の山の中腹あたり。明らかに場違いな小さな神社があった。

もちろんここは妖怪の山であり神主など住んでいるはずもなく、ただただそこに建っているだけであった。

そんな小さな神社に入ってゆく人影が一つ。妖怪の物ではない。人里からやってきた一人の男の人であった。

普通はこの山に入った人間はほとんどすぐに妖怪の餌となるのだが、どうしたわけかこの男は例外のようである。

この男、狩衣に身を包まれているところを見るにどうやらどこかの神社の神主のようである。

「ふう・・・いきなりこの様な大雨に見舞われるとは、ついてない。まあこの神社が見つかっただけまし・・・か。」

どうやらこの男は雨宿りのために入ってきたようだ。

いくら神社のなりをしていても、ここは妖怪の巣。普通は畏と考えるだろうが・・・この男はここがどこだか知らないのか、はたまたもつすでに生きることを諦めているのか。

・・・ギギー・・・

本殿に入り、荷物を整理していた男が手を止める。扉が開いた音がした。誰が入って来たようだ。

「あら、先客がいたの。雨宿りしようと思ったのだけれど・・・」
入ってきたのは若い女だった。暗くてよく見えないが見たことのない紫と白の服で不思議な帽子を被っており、髪は金色だった。

「かまわんよ。あんたが良いならな」

男がそう言うと女は顔をしかめた。

「貴方、ここがどこか知っているの？」

男は女がなにを言いたいのかはわかっただろう。しかし、男は知っていると言っただけだ。

「それなら」

「少し、俺の身の上話を聞いてはくれれないか」

男は女が話すのを遮るよ様に言葉を発した。

男は壁に寄りかかり目を瞑りながら返事を待たずに話を始めた。

女はいきなり話をする、しかも自分の生い立ちから詳しく話す男に少し機嫌を悪くした。

男は自分の生い立ち、神職の息子に生まれたこと。小さな神社の神職になったこと。そのうち結婚したこと。小さな女の子が生まれたことを話すと、ここからが本番なのか一息ついて続けた。

「その時まで俺は幸せはいつまでも、いつまでも続くものだと思っ
ていた。」

「なにか、あつたのかしら」

女ははっきり言ってもう聞き飽きてしまっていたため早く終わらせようとした。

しかし、女は男の話に驚いた。

「ああ、騙されたんだよ。妖怪に。娘を連れさらわれたんだ。」

男は少し声を大きくして言う。

「その妖怪の名が八雲紫っていうんだ。あんたのよく知る奴だと思
うが」

女は声が出なかった。その八雲という名の妖怪を知っていて、あ
まりにも知りすぎた妖怪の名で声が出なかった。

「あんた、そいつに会ったら言っといってくれよ。なにが妖怪と人
間の理想郷だって。そりゃあ多くの奴等は理解し合って共存して
るかもしれない。でもな」

女は他人が言われているように思えない。

「たった一人、たった一人でも理解出来てないやつが居る。それはお前にとっちゃあ小さなことかも知れねえ。だが、そいつにとつちやあ滅茶苦茶大きな事なんだ」

男は言った。

「俺もお前の意見には賛成だ。だが・・・実現は無理なんだ。たった一人でもそう思う奴が居ればその理想は崩壊する」

男は言った。俺はお前を許さないと。そして、最期に良い冥土の土産ができた。ありがとうと。

雷が鳴った。まだ雨は降り続けているらしい。

「さて、雨もなかなか上がりそうにないな。俺はそろそろ寝るとするよ」

男はそう言つと向こうを向いて横になった。

そんな男の自分勝手さを見ながら女は怒っていた。勝手に人の理想を批判し、勝手に最期の言葉を残して眠りだした。

恐らくこの眠りは永遠の物となるだろう。女が何もしなくても他の妖怪が食らう。

男の寝顔はとてすがすがしそうだ。

本当にそうなのだろう。言いたいことを言いたただけ言ったのだ。それを言うことが人生最後の夢だったかもしれない。このまま死を受け入れた顔だった。

冗談じゃない。女はそう思った。

目の前の人間は自分を馬鹿にしてあんな事を言ったのだ。このまま食らってしまえばいい。

だが、女はそれが出来ない。

女の理想は人と妖怪の共存。だからそれを否定したこの男を食べてしまうのは自らそれを証明するようなものだ。

女はよく眠っている男の顔をずっと見続けていた。

対義する物は決して類義することは出来ない。

それを考える者によって、またはその相対する物によって答えは変わってくるだろう。

或いは答えなど存在しないのかもしれない。

しかしこの話を締めくくるためあえて答えを出すのならば

俺が出すのは「そんな事考えても意味がない」というものだ。

考える事は出来るだろう。だが、それを考えて何になるだろう。

世界は相対する者があるからこそ楽しいのではないだろうか。

そんな世界の、数少ない楽しみを消し去ろうとは全くもって意味のないことであろう。

・・・俺が言いたいのはその言うことだ。もちろん意味のわからなかった者も居るだろう。

しかしそれは人がみな一つになれない証拠でもあるのだ。

人それぞれ考えが違ふという証拠でもあるのだ。

(後書き)

ここまで読んでくださってありがとうございます。

勝手な自己解釈については目を瞑っていただきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3878t/>

人間と妖怪。

2011年10月8日15時40分発行